

## 審査の結果の要旨

氏名 譚 君怡

本論文は、台湾から日本への留学生・元留学生に対する半構造化されたインタビュー調査をもとに、日本留学の意味付けとその変容を、当事者である留学生の「自己形成」の観点から描き出したものである。

まず、第一章では、本論文の目的、及び、留学生教育と「グローバル人材」の育成に関する先行研究、インタビューの方法と対象について述べられている。本論文が対象とした留学生が所属する大学は、いずれも「グローバル人材」の育成を掲げる、(1) 旧帝大の総合大学(「従来型大学グループ」)であるか、(2) 英語による講義をはじめとする「国際化対応」を積極的に推進してきた大学(「国際化大学グループ」)である。

第二章では、台湾人留学生の自己形成の過程が、大学とのインタープレイの結果として分析されている。例えば、「従来型大学グループ」では、留学生が「日本の習慣に馴染む」ことが求められる中で得るもの(例 高度な日本語運用能力)と失うもの(例 日本社会とも出身社会ともつながらない時間の多さ)の両面が検討されている。他方、「国際化大学グループ」では、多様な背景の留学生と共存する経験等に恵まれながらも、ホスト国である日本に「浸る」機会が必ずしも充分でないことが留学生の語りから考察されている。

第三章では、日本独特の制度としての就職活動を経てきた留学生のインタビュー内容が分析されている。留学生と日本企業との期待のずれ、就職活動で「人物評価」への対応を求められる等、日本の就職活動の仕組みに阻まれ、大学から労働市場への橋渡しがされていない現実の中で日本留学の意義を再定義している留学生の語りが見られる。

第四章は、日本、または台湾で就職している元留学生の語りから、職業生活の文脈における、日本留学の意味を検討している。日本への長期留学生が武器にしようとする、本論文が「知日力」と呼ぶものの効力の国際的低下と、英語・英語圏の台頭の中での留学生の苦悩が描かれている。

第五章と終章とでは、「従来型大学グループ」の特徴を、体系的な教育プログラムよりも、日本の中に「馴染み」、見習いながら「知日力」を獲得してゆく「知日力修業モデル」として集約している。このモデルの下での教育は「教養的グローバル人材育成」にはつながるものの、労働市場には直結しない等の問題提起がされている。

本論文は、従来、在日留学生研究が一方では入学前の学生募集や大学の受け入れ体制の分析、他方では入学後の留学生の「異文化適応」に主として目を向けがちであったことを乗り越え、日本の大学の国際化というマクロな課題と、留学生の日本留学を通じた自己形成への意味付けというミクロな過程とを結びつけ、日本の大学に対する新たな視点を提供している。

よって、本論文は、博士(教育学)の学位を授与するに相応しいものと判断された。